

目次

§ 1 概要	p 1
§ 2 研修の詳しいスケジュール	p 2
§ 3 参加学生の言葉から	p 5

§ 1 概要

■はじめに

法政大学哲学科の選択必修科目「哲学特講」の一つ「国際哲学特講」（秋学期 2 単位）では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力を得て、学期の最後、2月初め（2019年2月3日～2月10日）に、ドイツのハイデルベルグ大学とフランスのストラスブール大学で、合同ゼミを実施しました。

この合同ゼミは、3つの大学それぞれで正規の行事であって、このゼミが締めくくる半期の授業全体が、法政大学とそれぞれの大学とで共同運営されています。2018年8月に、翌年2月の合同ゼミでのテーマと共通テキストを共に選定することから始め、9月から翌年1月まで、それぞれの大学では合同ゼミ準備授業を展開しました。その間、10月から1月まで、ひと月に一度、計4回、ストラスブール大学と法政大学との間では、スカイプを通しての学生間対話も実施されました。

このような準備を経て、研修期間中に、まずはハイデルベルク大学で、ついでストラスブール大学で、それぞれ合同ゼミが行われました。

■合同ゼミの内容

ハイデルベルク大学

2月4日にハイデルベルク大学で、ハンス・クレーマ先生ならびにクレーマ・ゼミの皆さんと、「日本国憲法第9条」をテーマに合同ゼミを行いました。

伊藤成彦著『物語 日本国憲法第9条—戦争と軍隊のない世界へ』を共通テキストに、法政側の発表をもとに話し合いました。発表では、第二次世界大戦後、日独両国で、どのような仕方で平和理念の具体化が図られていったか（日本の平和憲法、ドイツの和解外交）、また他方で再軍備（日本の自衛隊、ドイツの連邦軍）や軍事同盟構築（日本の日米安保、ドイツのNATO）がどう進行していったのかが確認され、それに基づき、平和維持のために、今後、両国の、とくに日本の取るべき道が議論されました。中立主義の追究といった興味深い考えも出されました。ただ話し合いでは、同じ敗戦国でありながら、戦争責任の捉え方や、憲法のあり方、徴兵制や核兵器、海外への軍派遣などへの対応で、日本とドイツには無視できない違いがあることが、互いに実感として把握されていったことが意義深かったと思います。

ストラスブール大学

2月6日にはストラスブール大学で、昼食をはさみ丸一日、黒田昭信先生ならびに黒田ゼミの皆さんと、ラフカディオ・ハーン著『日本の面影』を共通テキストとして合同ゼミを実施しました。

半期の準備を経てのものですが、同テキストから双方が具体的に話題として取り出したのは、①ハーンが多用している「ghostly」という言葉の意味、②ハーンによる「日本人の微笑」の理解、③妻節子

の役割、節子を通して見たハーンの日本理解の特徴、④ハーンを範例とした場合の異文化理解の意義と限界、⑤日本でハーンに印象を与えたものと与えなかったものの違い、などの諸点です。これらについて、ストラスブール大学の3グループ(①、③、⑤)と法政大学の2グループ(②、④)が、それぞれ発表を行いその後に議論が行われました。ハーンは日本に、キリスト教や西洋近代文明に影響されておらず、さらには仏教や儒教の到来にさえ先立ってあった独特の美質を見たわけですが、それが何だったのか、各発表は、それぞれの視角からその問いに迫るものでした。もちろん確たる答えが得られたわけではありませんが、興味深かったのは、ここでも日仏の違いで、その美質をよきものとは必ずしも言えないと感じる法政の学生たちは、それをよきものとしてそれに肉迫しようとするストラスブールの学生たちの追究の迫力に少なからず驚かされた様子です。

翌2月7日には、ストラスブール大学で、同大学の高橋希実先生の特別講義「日本語のバリエーション—社会言語学による考察」を聴講しました。講義に先立って、高橋先生から前もって出されていた課題に答える形で、法政大学の担当グループによる、自分たちが普段用いている日本語とはどんなものかを紹介する発表がありました。この機会に「社会言語学」という学問を、学生たちは初めて知ることになりました。

最後2月8日には、CEEJAで、ストラスブール大学講師鑄物美香先生が「留学のすすめ」と題したレクチャーをして下さいました。ご自身の留学における勉学と生活の体験を、その意義に触れて、印象深く語って下さいました。講演の冒頭で鑄物先生が紹介された、'Be proud of what you love'という言葉は学生たちの脳裏に残るものとなったと思います。

■見学、観光とガストロノミー

以上はかなり密な研修の合間を縫って、ハイデルベルク旧市街(学生牢、ハイデルベルク城、ネッカー川など)、セレスタ旧跡(ユマニスト図書館など)、オーケニスブール城、エギスハイムやリクヴィルといったアルザスの小村、ストラスブール旧市街(プチット・フランス、大聖堂など)、コルマー旧市街(ウンターリンデン美術館など)を見学しました。また、食文化で知られるアルザス地方の代表的な郷土料理(シュークルト、タルトフランベなど)や名産のワイン(リスリング、ゲビュルツトラミネールなど)も賞味しました。

■授業以外での学生間の交流

2月4日のゼミの後、ハイデルベルグでは、ハイデルベルク大学生たちと学食で昼食をともにしました。またストラスブールでは、一日ゼミの日であった2月6日、ストラスブール大学生たちと昼食や夕食をともにしたのはもちろん、その夜はともに、CEEJA近くのミッテルヴィルの宿泊所に宿泊し、懇親会も含む楽しい交流の時間を持ちました。またその翌日2月7日のストラスブール旧市街のグループでの見学には、ストラスブール大学生たちが分かれて同道してくれました。ゼミを通じてとはまた別の打ち解けた交流も活発に行われました。

■フランス公共放送(FR3)によるテレビ取材

2月8日のCEEJAでの鑄物先生の講演会の終了後に、その会場で、フランス公共放送の一つであるFR3の取材スタッフが入り、安孫子や、学生の2-3人が、アルザスでこのような研修を行うことの意味や意義についてのインタビュー取材を受けました。これは2月中にオンエアされるということでした。

§ 2 研修の詳しいスケジュール

法政大学「国際哲学特講」

2018年度アルザス研修プログラム

2019年2月3日（日）～10日（日）6泊8日（一泊機中）

法政大学参加者：

- ・哲学科学生 19名（イタリア・ボローニャ大学大学院に留学中の哲学科既卒学生1名が途中で一部参加）
- ・引率 安孫子信

■1日目

2月3日（日）

19:10 羽田空港より直行便でドイツ・フランクフルト空港到着。

20:00 チャーターバスにてフランクフルト空港到着よりドイツ・ハイデルベルグへ移動

夜ハイデルベルグで自由夕食

ハイデルベルグ・ホテル泊

■2日目

2月4日（月）

ホテルにて朝食後、ハイデルベルグ大学に向けて出発（徒歩）

9:30 ハイデルベルク大学にて合同ゼミ

ハイデルベルク大学日本学科ハンス＝マルチン・クレーマ先生

合同ゼミ「日本国憲法第9条」

ハイデルベルク大学日本学科生＋法政大学哲学科生

12:30 大学学食にて昼食

13:30 旧市街見学（学生率・ハイデルベルグ城・古橋）

17:00 チャーターバスにてアルザスへ向け出発

19:00 中途のレストランにて夕食

22:00CEEJA 着

CEEJA 泊

■3日目

2月5日（火）エクスカーションの日

7:30CEEJAにて朝食

9:00 オーケニスブール城へ向け出発

9:45 オーケニスブール城見学

11:30 オーケニスブール城からセレスタへ向け出発

12:00 セレスタのレストランにて昼食

セレスタ市内見学（ユマニスト図書館、サント・フォワ教会、サン・ジョルジュ教会）

14:30 エギスハイムへ向け出発

15:15 エギスハイム見学

16:45 リクヴィルへ向け出発、着後リクヴィル見学

18:30 リクヴィルのレストランにて夕食

21:00 CEEJA 着

■4日目

2月6日（水）

7:00CEEJAにて朝食

8:00 ストラスブールに向けて出発
10:00 ストラスブール大学理学部 248 教室にて合同ゼミ・午前の部
ストラスブール大学日本学科黒田昭信先生
合同ゼミ「ラフカディオ・ハーン『日本の面影』をめぐって」
ストラスブール大学日本学科生＋法政大学哲学科生
12:30 大学近隣のレストランにて昼食
14:00 ストラスブール大学理学部 248 教室にて合同ゼミ・午後の部
17:00 ゼミ終了 ミッテルヴィルに向け出発（ストラスブール大学生同行）
19:30 ミッテルヴィルのホテルにて夕食
夜ストラスブール大学の学生と懇親会（ホテル・ホール）
ミッテルヴィルのホテル泊（ストラスブール大学生宿泊）

■5 日目

2月7日（木）
7:30 ミッテルヴィルのホテルにて朝食
8:30 ストラスブールに向け出発
9:30 ストラスブール旧市街・ユネスコ世界遺産カテドラル見学
12:00 自由昼食・自由見学
13:30 ストラスブール大学へ移動
14:00-17:00 特別講義／ガリレオ別館第6教室
ストラスブール大学日本学科高橋希実先生
「日本語のバリエーション—社会言語学による考察」
18:00 カイザルスベルクに向け出発
19:30 カイザルスベルクのレストランにて夕食
CEEJA 泊

■6 日目

2月8日（金）
7:30 CEEJA にて朝食
9:30 CEEJA オリガスホールにて若手研究者による発表
ストラスブール大学日本学科講師鑄物美香先生発表
「留学のすすめ」
※FR3 による取材
12:00 コルマールへ向け出発
12:30 旧市街にて自由昼食
15:00 ウンターリンデン美術館見学、その後市内自由見学
18:00 CEEJA に向け出発
18:30 CEEJA 帰着
19:00 CEEJA にてディナーパックの夕食
CEEJA 泊

■7 日目

2月9日（土）
7:30 CEEJA にて朝食
10:30 バーゼル空港に向け出発

14:15 バーゼル空港発、フランクフルト経由、羽田空港着で帰国（翌日）
全移動手段チャーターバス

§3 参加学生の言葉から

①学生 A さん

<感想>

わたしはずっとヨーロッパの地を踏むことにとっても憧れを抱いていた。普段は目に見えて喜びを表すことはあまりないのだが、今回の研修中わたしが人一倍楽しそうにしていたと自負できるくらいドイツ・フランスに来られたことが嬉しかった。その地を訪れることが出来ただけでも十分贅沢であるが、研修に参加した一週間はととても、人生で一番と言っても良いくらい濃い一週間であった。それは、たくさんの歴史的な建造物を見たり、たくさんの人々と出会ったり、当然であるがたくさんのことを学んだからだ。

見たものは、あまりに多すぎて全ては書ききれないが、わたしが特に印象に残っているのが城と大聖堂である。ドイツではハイデルベルク城を、フランスではオーケニスブール城を見学した。二つの城は、どちらも切石作りで見た目からまず圧巻される。最も興味深かったのは、戦争で実際使われていない前者と、使われた後者の違いである。この二つの城を二日連続で見学できたことは贅沢だと思った。ハイデルベルク、そしてアルザスの様々な村々の建築物や街並みはととても魅力的で目を奪われるばかりだった。その中でもあまりのすばらしさに呆然としてしまったのが、ストラスブール大聖堂だ。日本ではまず見たことのない多き荘厳な外観、中のピリッと張り詰めた空気の中輝くステンドグラスと優しく灯る蝋燭の火。わたしは特定の宗教を信じている訳ではないが、そういうものを超越した凄みを感じた。

わたしは二日目のハイデルベルク大学でのゼミの発表担当だった。発表自体は、専門分野外でありどちらかといえば苦手な国際政治に絡んだものであった。しかし、グループの皆の力や安孫子先生の手助けにより、(当日多少のトラブルはあったものの)無事にやり遂げることが出来た。そこでの学生たちの質問や討論では、自分と少ししか歳変わらない彼らの視野の広さと、自分が如何に自国の歴史を知らないか、自らの知識の貧弱さを身に染みて感じた。クレーマ先生の鋭い視点からの指摘もとても勉強になった。当初の予定を変え、英語原稿を配布しての日本語での発表だったが、チャレンジして英語での発表もやってみたかったと今は考えている。

フランスでのストラスブール大学の学生たちとの合同ゼミや食事、観光もとても刺激的であった。合同ゼミでは、主にラフカディオ・ハーンについて学んだが、日本での講義では学べない「西洋人から見たハーンの印象」、「双方の異文化理解」に触れることができ、充実した時間であった。学生たちの日本語力には脱帽したし、何よりわたしたち日本人の学生に歩み寄ってくれるのがとても嬉しかった。どのくらい日本語力が高いかというと、懇親会の際にくだけた話を楽しめるくらいである。そのおかげで何人かとはとても仲良くなれ、彼らが日本を訪れる際には会う約束も出来た。また、黒田先生、徳江さん、高橋先生、鋳物先生という異国の地で学び活躍する日本人のみなさんとの出会いもとても貴重なものだった。

この研修は安孫子先生をはじめ多くの人々の支えあってのものだ。その多くの人への感謝を表すためにも、研修で学んだことを今後の大学生活に生かしていきたい。

<考察>

わたしがこの研修で最も学びそして、今後強く生かしていきたいと思ったことは「視野を広く持つこと」だ。昨今「グローバル化」の波が押し寄せているが、わたしは自分で言うのもなんだが天邪鬼であるため、「日本でずっと過ごせばいいし日本語だけ話せばいいや」とも思っていた。しかし、今回の研修において日本語を一生懸命学ぶ学生たちや、異国で異国の言語で学ぶ日本人の学生さんや先生方の姿を目の当たりにして、純粋に「かっこいい」と思った。外国語がペラペラな点や外国で暮らしている点、という目に見える部分だけでなく、様々な文化に触れたからこそその感性や考えが羨ま

しくなった。そして、如何に自分が狭い視点しか持たず、何も知らないのかを痛感した。

まだ何を本格的に学ぼうかすら定まっていないが、漠然と「なにかを突き詰めたい」という気持ちが沸き上がっている。そして、英語にとどまらず様々な言語を使いたくさんの人と交流したいという気持ちが生まれた。ちなみにストラスブールとの学生との会話の中で一番不甲斐なかったことは、彼らに「何の言語が話せますか？」と聞かれ、正面に座っていた同級生と顔を見合わせ微妙な顔で「・・・日本語だけです」と答えたことだ。

今は帰国したばかりで頭の整理が出来ていないため、具体的に学んだことをまとめられないのが残念であるが、これからじっくり学んだことを形にしていきたいと思う。参加して本当に幸せだった国際哲学特講だった。

②学生 B さん

<感想>

実際に研修としてドイツ・フランスに向かい最も衝撃的だったのは「海外に行くことはそんなにおそろしいことではない」と分かった点である。私は今まで日本を出たことがなかったので海外がどのようなものか見当もつかなかったが、なんとなく危ない場所というイメージがあった。しかし行ってみるとその印象は変わった。はじめは水や食べ物が合わないのではないかと、現地の人とコミュニケーションが取れないのではないかと、ものすごく治安が悪かったらどうしようという不安で胸がいっぱいだったが、いざ行ってみると食べ物は美味しいし、思いの外コミュニケーションも取れてとても楽しかった。そして研修での素晴らしい体験を経て「もしかしたら海外でしばらく暮らすのも良いかもしれない」と人生に新しい選択肢が出来たのは非常に大きなことだった。その素晴らしい体験とは以下の出来事である。

まず1つ目に人が緊張の下に動いていなかった。店に行くとき日本のような過剰サービスや常ににこにこしているということはなく、とても自然な接客だった。接し方がルーズだったがとも言えるが、日本のような人と人の間の隔たりがあまりなく心地が良かった。

2つ目は異文化との接触である。日本から出たことがなかった私にとって話す言葉、街のつくり、食べ物、飲み物、全てが初めて見る光景というのは大きなインパクトだった。フランスもドイツも室内は本当に快適だった。恐らくオイルヒーターが完備してあったからだと思うが、日本もそうになって欲しい。そして私は環状道路というものを初めて見た。大きな円形の道路をバスでぐるぐる回ってフランス語で書かれた標識やぶどう畑を通り過ぎるのはとても楽しかった。食べ物についてだが、「ヨーロッパ人はミネラルを水で摂るから野菜を食べない」という噂は本当だった。私はパンや肉を食べながらサラダが欲しくて仕方なかったがドイツ人もフランス人も気にしていなさそうだった。それが食について1番驚いたことである。(くだものは食べていた)。また、言葉についてだが、実は私は第二外国語がスペイン語なのでドイツ語もフランス語も全く分からなかった。私は初めて「何が書いてあるのか、何を言われているのか、何を言えばいいのか分からない」という状況に陥り、非常にまずいことだと思い知った。文字通り何も出来ないからである。私は今まで自分がどんなに狭い世界で生きていたかを初めて知ったし、言葉を勉強していないのは致命的だとわかった。そしてドイツ人もフランス人も英語が堪能だったことに引け目を感じてしまった。英語はそれなりに勉強したはずだが会話するには至らなかったのだ。自分の不勉強さを知っただけでもとても良い機会となった。

最後に合同ゼミについて。私が最もインパクトを受けたのはハイデルベルク大学の「日本国憲法第九条」の講義である。法政大学側からのチームの発表が終わり、ディスカッションをしていたとき私は「戦争に対するドイツ人と日本人の認識の差」を感じた。私は今までドイツは日本と同様の敗戦国で戦争や軍を恐れているものだと思っていた。だが実際はドイツにとって戦争(特に第二次世界大戦)はナチスのおかした過ちという意識が強く、特段軍や戦争を嫌っているわけではないということがわかった。話し合いの中で「戦争を本当に怖がっているのは原爆や空襲で多大な被害を受けた日本くらいでは」との話題が出た。それは本当に怖いこと(戦争を恐れない点で)だが、他の国の人々の率直な

感想を聞いたことは大きな収穫だった。

他にもさまざまな楽しいこと、学んだことはあったが、以上が大きなこの研修での素晴らしい体験である。これにより私の海外への当初のイメージは大きく変わり、異文化への探求心が膨らむ良い機会になった。

<考察>

この研修での大きな気づきと今後に生かしたいことをまとめていく。

まず1つ目に語学について。ハイデルベルクでもストラスブールでも現地の学生が日本語を話してこちらに合わせてくれるというのは情けないと感じてしまった。特にストラスブール大学の学生とは大学外の街やホテルでも一緒に行動し、雑談もしたがその語学力の高さに驚いてしまった。中には日本に行ったことがないという学生もいて、それでもこれだけ話せるということはかなり熱心に勉強しているのだろうと思った。私はずっと日本にいたので日本語さえ話せばいい、それで特に苦労はしなかったと思っていたが、それは自分の視野が狭いために起きた発想であるということがわかった。世界にいるのは日本人だけではない、外国語が話せないとこの狭い世界から出られないということを感じた。また、ストラスブール大学の学生は日本の文化特にアニメやゲーム、音楽などが好きで日本に興味を持った人が多かった。それを聞いて他の研修に参加した法政の学生と話したことなのだが、そこまで熱中出来る、一生懸命になれるものを自分たちは持っているのかという疑問がわいた。(例えば日本が好きなので必死に日本語を勉強するなどということ)。自分たちが大学に入った段階で満足し、没頭できることも努力することも無く過ごしてきたということ話し合い、自分を変えなければいけないのではと思った。

2つ目に鋳物先生の講義を聞いて。鋳物先生の講義では「とにかく軽い気持ちで留学してみるといい」ということを教わった。「留学のためには物凄い決心がいる」と思っていた私はそれだけでかなり驚いた。しかし異国の地に来たことにより人生を変えた経験を聞くうちに自分も留学してみたいという気持ちになった。日本から出るなどとてもないと思っていた私にとってそれは大きな変化となった。

3つ目にプレゼンの準備と発表について。私はラフカディオ・ハーン日本の面影から日本人の微笑みについてまとめ、発表した。発表にあたってベルクソンと梅原猛の文献を参考にし、かなり本格的なものが出来た。これだけの本格的なプレゼンをするのは初めてであり、制作は難航したが新しい発見がありとても楽しくもあった。特に内容が複雑化したのでどうすれば伝わりやすいかチームの一部の人と深夜までパワーポイントや原稿を修正し、ギリギリまで練り直したのは大変だったがやりがいのあるものだった。また本番のストラスブール大学での発表は準備の甲斐あって問題なく終了出来た。その後の質疑も含めてひとつの本からテーマを絞り大勢の場で発表するという経験は私の中で実りあるものとなった。これでパワーポイントを用いた大きな発表のやり方がなんとなく掴めたので次に何か大きな発表をする際はさらなる高みを目指していきたい。

以上のようにこの研修を通して私の視野はかなり広がり、今後の人生を考え直すとても良い機会となった。今考えてみても半年間の懸命な準備、他の国の大学でのゼミ、仲間と異国の地で過ごす1週間というのはかなり貴重な体験であり、研修に参加して本当に良かったと思っている。

最後にこのような機会を与えてくださった安孫子先生、ストラスブール大学、ハイデルベルク大学、セ ज्याの方々、この研修成功に協力して下さった全ての方々感謝の気持ちでいっぱいです。

③学生C君

<感想>

私の印象に残ったことは何よりも人とのかかわりだ。研修の途中で価値観の変化は何によって起こるか話していた時に、「確かにモノとしての異文化に触れ、感じ、経験することも刺激にはなるが、人に一番影響を与えられるのは人以外にない」という話が出た。このことを今回実感できた機会が多くあったのでそのことを以下にまとめる。

・現地の方

私はドイツのホテルで一度カードキーの磁気を飛ばしてしまい、部屋から閉め出されてしまった。そのことをフロントに伝えにいったとき、フロントの方は私のつたない英語に根気よく耳を傾けて言いたいことをくみ取ろうとしてくれた。日本では当然言葉に詰まることがないのでこのような経験もないのだが、傾聴してくれることが嬉しかった。またフランスではすれ違う時でも必ず「ボンジュール」といってくれたり、その場で絞るタイプのジュースサーバーの使い方に迷っているとスッと操作を手伝ってくれたりした。日本だと小さなコミュニティでできることでも、社会という大きなコミュニティになるとできなくなる傾向がある。が、ドイツ、フランスではその違いを感じることはなかった。ドイツ、フランスでは「社会の一員」という言葉は、「部分・構成要素」という切り離されたものではなく、「私が社会であり、社会が私である」という不可分で一体的なものになっていると感じさせられた。

・法政の学生

いつも大学で会える相手ではあるが、一週間も昼夜を問わずともにいたので法大生からも多くの刺激を受けた。飛行機・バスでの移動時間が非常に長く互いの人生観・世界観を語る場となった。普段自分の中で考えていることはどうしても自分に都合のいいように考えてしまうから、誰かを相手にして話すのは自分の考えをまとめなおすよい機会になったし、別の視点からの切り口を与えられたことで新しい展開を自分の考えに与えることができた。また、月並みではあるが単純に友人が増え、新しいコミュニティに参加できるようになった。前から遠巻きに面白そうだなと思っていた人たちと関係を築くことができたのは一つの収穫だった。

・ストラスブル大学

私が一番よく話したマレクは私の思っている理想の人間像をほとんどそのまま体現したような人で、自分のしたいことのためになら努力し続けることができ、意見があるときはためらわずに相手に伝え、文句があるときも直接鋭く切り込めるという人だった。中でも印象的だったのは高橋先生の日本語についての講義でマレクの意見に私が反対したが、時間の都合で議論が切り上げられてしまった時、後から「綾君、あれは～ってことじゃなくて…」と議論を再開させて二人でまた盛り上がったことだ。容赦もなく厳しい言葉を言う人ではあったが、ごまかしのないまっすぐな意見だったからこそ正面から意見をぶつけ合うことができ、充実した時間を過ごすことができた。相手を思いやることや慎重に考えることは非常に大切ではあるが、ともすると悩みすぎて動けなくなってしまうので、自分の考えを優先させた軽やかさも取り入れることが必要だと感じた。

・留学した方たち

この研修で私にとって一番大きな影響を与えたのは先輩方だったように思える。藤本さんがストラスブル大学の学生とともに授業を受け、話をしている姿は自らの力で自ら道を拓いているようで素直にかっこいいと思えたし、鑄物先生の、これまでの研究についての、「偶然の積み重ねだけど、することはしてきた」という言葉にも、自分の好きなことが軸になっている強さが感じられた。特に樋口さんと話した夜はある意味“決定的回心”のようなもので、それまで私の中にまるでなかった留学という選択肢が現れてきた。樋口さんから、留学で得られるものとして、「人間同士の衝突が絶えず、生きている実感がする」という言葉を聞いたときはとてつもなく衝撃を受けた。衝突を避け、穏やかさの中に居座ろうとする、そんな「退屈な人間」になってしまうのは嫌だと強く思い、「留学してみたい」ではなく、「留学しなければならない」と思った。

<考察>

私が今回の研修を通して得られたものは自分を見つめなおす機会だと考える。授業（ディスカッション）で取り扱ったテーマとして大きかったのは異文化理解と自文化理解であり、もちろんその内容から学べたものはあるが、この研修の真の目的・本質ともいえることは議論の題材にした話題などではなく、価値観のブレイクスルーにあると強く感じた。なぜなら実際にヨーロッパに行って私が出会ったのは、食べ物や建築といった異文化では恐らくなく、「異文化に触れた私」だからだ。極端に言え

ばモノ自体はあくまで自分を見つめなおすツールに過ぎず、今までに出会ったことのない自分と向き合うことによって、「この先どうなりたいか、どう行動していくのか」を考えることがこの研修の醍醐味だった。正直なところ私はこのことについて、今回の研修で私以上に気づきを得た、成果のあった学生は他にいないと自負している。そう断言できるほど得たものは大きい。マレクの自分の心の導くままに進んでいくひたむきさや言いたいことを言うはっきりとした態度、樋口さんの「チャンスはそこら中にあるがつかまなければ意味がない」という言葉、私の好きな“The world ends with you”（世界は自分の知見通りの大きさしかない）という言葉など、今まで自分の中になかった価値観と今まで持っていた価値観とが統合されていって、それまでの自分の考えていた世界がいかに狭かったかを思い知らされ、自分の行うことの全ては限りなく自由で、全て自分の責任や覚悟の下にあると、ようやく体で理解することができるようになった。そして同時に、留学については願望でも決心でもなく、「私は留学することになっている」と既定の事のように感じ始めている。頭の中にあるばらばらの感覚がまとまってきて、その統合が未来につながっているという、今のこの確信を失うことのないように、次のブレイクスルーまで、この新たな価値観をしっかりと生きていこうと思う。

関わってくださった方全員に感謝申し上げます。ありがとうございました。

④学生 D さん

<感想>

私は今回が初の海外渡航でした。そのため見えるもの全てが新鮮で、とても良い経験になりました。残念であったのは一週間の研修であったため環境の変化、特に食生活の変化に適応することができず、体調を崩してしまいました。別の機会があれば、そちらの方面にも気を配った荷物準備をしていきたいです。

印象に残っていることは、一つに日本とは異なる静かさを感じたことです。ドイツに到着したのは夜の9時くらいでした。日本の都会であればこの時間帯も車や電車が走っており、歩く人々も多く賑やかですが、ドイツでは人も車も動いているのを見かけたのはごく稀なことでした。外国は騒音に厳しいとは聞いていましたが、日本とは騒音の社会でのあり方にかかなりの差があることを実感しました。同様のことはフランスでも感じました。リクヴィル村の教会に入った時、耳が痛くなるほどの静かさに耐えきれず外に出てしまいました。他にもフランスにいた際多くの教会を見学しましたが、多くの観光客がいたにも関わらず、とても静かな空間であったと感じました。日本の寺社は壁が薄く、外の音を感じ取るための静かさという印象に対し、西洋の教会は厳格で凜とした静かさで、恐れ戦かせるような印象を受けました。

他にも、街並みや教会を見て思ったことは、とても完璧な作りをしていることです。全体のどこを切り取っても、完成されているような建物の構図を興味深く感じました。線対称とも言える建物の構図から細やかな彫刻、ステンドグラスの光の入り方まで、全てが計算されているように見え、なんとも言えない感動に襲われました。

日本とヨーロッパでは文化や根本的な常識において、多くの差異があることを感じました。それをとくにストラスブールの学生との討論の場において強く感じることとなりました。話し合いの中で、日本では馴染み深いフランスでは全くそうでないものが現れてきました。それが文字です。私たち日本人は「文字は人柄を表す」と考えています。大ぶりで荒々しいのは男の字、小さく筆圧の薄い字の人は気が弱いといった風に、字で書き手を解釈することがあります。この話を討論の場でした時、彼らはそういったものはフランスに無いと言いました。どうやらフランスでは、字の大きさから性別を見分けるといったことはするようですが、人柄までは見ないそうです。この違いについてはもっと議論していきたくったのですが、残念ながら時間が来てしまい中断せざるを得ませんでした。

ドイツもフランスも両方とも、日本とは全く異なる世界観を有しており、良い意味でショックを受けることが多々ありました。それにしても、英語が苦手であった私でも、言語によるストレスが少なく交流を進めることができ、とても良い研修であったと思います。この研修を支えてくれた全ての人

に感謝の念しかありません。

<考察>

今回の研修で大きく考えたことは、日本とヨーロッパの互いを理解することにおいて、必要なのは差異の根本を理解することではないかということである。私が今回の研修で多くの学生と接してまず感じたことは、むしろ、国が違えども感じ方に大きな差はないということであった。何かここが明確に違うといったものはなく、私たちは互いに違いは無いとまで考えた。しかし、全てにおいて違いがないわけでは無かった。例えば感想にも書いた「文字から人柄をみる」といったことや、騒音に対する感性は私たちとは全く異なる価値観であった。それらを理解するには、私たちや他国の生活や生き方の根源である「文化」を考えていくしかないのでは無いかと思われた。そして、「文化」を考えるためには、現地に行き、触れることが何より重要であると思った。

例えば騒音に対する感性は、現地に来て初めて感じたことである。感想でも記した通り、ドイツもフランスも静かであった。日本よりも数倍の静けさに驚かされた。これでは日本のあらゆる音が騒音として感じられてもおかしく無いだろうと思う。また、研修中に感じたことだが住んでいる人々は、笑う時でさえも静かであるように感じた。なぜこんなにも静かであるのかを考えるにあたって、日本の寺社と比べ教会は外へ開放している部分がなく、音一つ許さないような雰囲気であったことが思い出された。寺社と教会とのこの違いが、騒音への価値観の差に繋がるのではないかと考えた。

他にも、文字についての考え方に差異があったことは感想でもあげたが、日本でよく言われているこの文字から見えてくるものの多さは、日本人が使う文字の多さからくると考えられる。文字が多く、そのそれぞれから、それを使う人の特徴を割り出すのが容易であるからでは無いかと考えられた。

このように建築様式や宗教性といった「文化」の違いを理解することで、その国にある常識を理解できるのである。「郷に入っては郷に従え」という諺がある。その土地を理解するためには「文化」を学び、「文化」を知ることが必要である。異なる文化圏に触れることは、こうして国を異にする相手を理解する上で必要であるが、さらに加えて、そのことで見識が広がり、他との比較で、自国の文化のよりよい理解も進むのである。

今回の研修で、私の中で劇的に変化したことはなかったかもしれない。しかし異文化理解というものの根本的な必要性を、研修前よりさらに強く感じている。現代のグローバル社会において異文化理解は必要であると語られている。だがそれが必要な理由を誰も完璧には知っていないのではないか。だから、ただ英語が話せていればいいといった風潮が根深い。確かに英語は必要である。だがそれ以上に、私たちの暮らしや「文化」を、来る観光客に理解してもらい、私たちも他の「文化」を理解することが重要である。それこそが異なる文化圏同士のトラブルの回避にも繋がることと考えられる。

私は今回の研修で、異なる互いの文化を理解していくことの重要性を学ぶことが出来た。

[※以上は帰路、あるいは帰国直後に執筆された、研修に参加した学生たちの感想レポートから、短めのもの4本を選び、筆者の了承の上で、転載したものです。]